ドイツ語における不変化詞動詞の統語的・意味的連続性*

岡 本 順 治

0. はじめに

不変化詞動詞 (Partikelverben) とは，Wunderlich (1983) 以来広まった用語であり，従来，分離動詞 (Trennbare Verben) と呼ばれていたものの一部を指す.「分離可能な接頭辞を持つ動詞」という定義自体が曖昧なため Duden Grammatik (1995: 423ff) では，接頭辞と並んで半接頭辞 (Halbpräfix) という呼称が与えられている．本論考でも，この種の動詞を不変化詞動詞と呼ぶ[1] が，その背景には，基本構造が「動詞＋不変化詞」であり，ただ単にドイツ語を含んだ一部のゲルマン諸語に見られる現象ではなく，広く他の言語にも見られる動詞句構造と共通の性質を持つと想定できるからである．本論考の目的は，ドイツ語における不変化詞動詞（以下，PV と略）の「不変化詞」（以下，PKL と略）がどのような統語的・意味的な特性を持っているかを，範疇の連続性という観点から明らかにすることにある.

以下では，まず従来「分離可能な前綴り」と言われてきたものが，統語的にどのような範疇に渡っているかを考察し，その非均一性を確認する．その中のひとつの形態である PKL は，統語構造と意味構造の平行性を前提にすることによって，PV の特徴を状態特性を持つ形容詞，場所関係を表す前置詞，さまざまな様態を規定する副詞との連続性の中で捉える認知言語学的視点が，より妥当性を持った記述・説明のために必要であることを示す.

*本論考は，平成 12 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 課題番号：12610536) 代表者：岡本順治「項構造の交替現象から見たドイツ語の不変化詞動詞の統語・意味構造に関する基礎研究」，平成 12 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B) 課題番号：12410122) 代表者：福本義憲「文法と知識 — ドイツ語研究を文法と知識のインターフェイスで捉えるための基礎的研究」，平成 12 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B) 課題番号：12410126) 代表者：鷲尾龍一 「言語間の差異に関する記述的・理論的総合研究～日中朝独仏英端の比較に基づく『差異の類型化』の試み～」の助成の元に行われた研究の一部である.

[1] 不変化詞という文法用語は，語形変化を伴わない品詞に対してつけられた総称だが，ここでは，狭い定義として，動詞に前置詞あるいは副詞が基底動詞に付随して作られた派生動詞を不変化詞動詞と呼ぶ．Stiebels (1996:38) では，不変化詞動詞と従来の分離可能動詞を同一視する広い定義を採用している．なお，Modalpartikel（話法の不変化詞）としてドイツ語文法で扱われるものと，本論考で使われる「不変化詞」は無関係である.

1. 「分離可能な前綴り」の種類

ドイツ語における「分離可能な前綴り」は，(1a)〜(1e) に示すように，名詞 (N)，形容詞 (A)，前置詞 (P)，副詞 (Adv)，動詞 (V) のようにその派生元が多岐に渡る．これらの派生動詞は,「分離可能な動詞」として，形態的にひとまとめにされてきた.

(1) a. An der Sitzung nahmen 20 Personen *teil*. (Teil: N)
on the meeting-DAT take-PST 20 persons-NOM part
'20 persons took part in the meeting.'

b. Marie hat sich die Haare *trocken*gerieben. (trocken: A)
Marie have-AUX herself-DAT the hair-PL dry=rub-PP
'Marie has rubbed her hair dry.'

c. Erich drückte die Tür *auf*. (auf: P)
Erich push-PST the door-ACC open-PKL
'Erich pushed the door open.'

d. Er hat einen neuen Geheimgang entdeckt, der
He have-AUX a new secret-passage discovered-PP which-REL-P
aus der Schule *heraus*führt. (heraus: Adv.)
from the school out=of-PKL-lead
'He has found a secret passageway out of the school.'

e. Was glaubt ihr, wie ich Thomas *kennen*gelernt habe? (kennen: V)
what think you-PL how I Thomas get-to-know-PP have-AUX?
'What do you think how I've got to know Thomas?'

以下では，これらの派生動詞がそれぞれの「分離可能な前綴り」によって，異なった性質を持つことを見ていく.

1.1. N＋V と V＋V

上記の「前綴り」の内，N と V に関しては，新正書法[2] により大部分が分かち書きされるように変更された．例えば，achtgeben (〜に注意する) は Acht geben, haltmachen (停止する) は Halt machen，radfahren (自転車に乗って行く) は Rad fahren のように分かち書きされる[3] ようになった．N ＋ V の場合は，多くの場合，対格目的語が無冠詞で固定された N を含む動詞句的慣用句であると見なす

[2] 1998 年 8 月 1 日より施行.

[3] ただし，standhalten (〜に耐える) や teilnehmen (〜に参加する) は，Stand halten, Teil nehmen のようにはならず，従来通り一語として記す．N ＋ V の派生動詞の中で，N が Heim, Irre, Preis, Stand, Statt, Teil, Wett, Wunder が特別扱いされている.

ことができる．すなわち，Rad fahren は，Auto fahren （自動車を運転する）と平行的であり，radfahren と記す必要はなかったと考えられる.[4)]

また,「前綴り」が動詞の場合も，kennenlernen (～を知るようになる) が kennen lernen，sitzenbleiben（留年する）が sitzen bleiben, liegenlassen（置き忘れる）が liegen lassen のように２語として書かれるようになったため，分離の前綴りという従来の枠から外れて意識されやすくなった．つまり，V ＋ V の場合は，V[INF] ＋ lernen, V[INF] ＋ bleiben, V[INF] ＋ lassen という共通形式で捉えやすくなったと言える.[5)]

そもそも「分離動詞」という考え方自体が，正書法からくる意識であり，本来その「前綴り」のように意識される部分に語アクセントが置かれるという音声的特徴を反映させようとした結果であることは，Drach (1937) の指摘を待つまでもなく，Adelung (1782) に於てすでに指摘されていた点であり，統一的な正書法があたかも一語のように表記することを選んだ時点で，本来の言語現象を誤解を招く方向に導いていったと考えることができる.

1.2.　A ＋ V

A ＋ V の形式を持つ派生動詞は，３つのタイプに分けて考えることができる.

第１類：

接頭辞動詞として語彙化されているもの．これらの派生動詞は，A と V のそれぞれの部分の意味の単純な合成とはなっていないもので，例えば以下のような動詞がある.

	(A ＋ V)	A	V
1)	frohlocken (vi.) 歓声を上げて喜ぶ	froh 楽しい	locken (vt.) ～をおびきよせる
2)	langweilen (vt.) ～を退屈させる	lang 長い	weilen (vi.) とどまる
3)	mit x liebäugeln (vi.) x を欲しそうにする	lieb いとしい	mit x äugeln (vi.) ～と目配せをかわす
4)	vollbringen (vt.) ～を成し遂げる	voll いっぱいの	bringen (vt.) ～を持ってくる
	(A ＋ V)	A	V
5)	weissagen (vt.) ～を予言する	weise 賢い	sagen (vt.) ～を言う

[4)] しかし，一方では gewährleisten（保証する）という非分離動詞と Gewähr leisten のような２語による記述を認めるなど，理由不明の対応も新正書法には含まれている.

[5)] ただし，従来は，sitzenbleiben が「留年する」で，sitzen bleiben が「座ったままでいる」と書記上区別されていたが，この区別が見えなくなるという弊害を伴った.

第２類：

A＋V の形式を持つ「分離動詞」でありながら，意味的には，派生動詞全体が状態の解釈を持ち，動詞はコピュラとして機能するもの．A は，状態描写 (depictive) としての意味を付加している．以下に若干の例をあげる．

	(A＋V)	A	V
1)	stillhalten (vi.)	still	halten: (vi.)
	じっとしている	静かな	止まる
2)	stillsitzen (vi.)	still	sitzen: (vi.)
	じっとしている	静かな	座っている
3)	stillstehen (vi.)	still	stehen: (vi.)
	止まっている	静かな	立っている
4)	übrigbleiben (vi.)	übrig	bleiben: (vi.)
	残っている	残りの	とどまる
5)	nahestehen (vi.)	nahe	stehen: (vi.)
	～と近い関係にある	近い	立っている

第３類：

A＋V の形式を持つ「分離動詞」であり，V の表す行為の結果が，A で表されているもの．A は，行為の結果生ずる状態であり，この形式は，結果構文と見なされる．

	(A＋V)	A	V
1)	festbinden (vt.)	fest	binden (vt.)
	～を縛って固定する	固定した	～を縛る
2)	freipressen (vt.)	frei	pressen (vt.)
	～を圧力を加えて釈放させる	自由な	圧力を加える
3)	hochschrauben (vt.)	hoch	schrauben (vt.)
	～を回して高く上げる	高い	～を回して閉める，緩める
4)	totschlagen (vt.)	tot	schlagen (vt.)
	～を打ち殺す	死んでいる	～を打つ
5)	trockenreiben (vt.)	trocken	reiben (vt.)
	～をこすって乾かす	乾いている	～をこする

第２類の A＋V か，第３類の A＋V かは，基底動詞の性質によって左右される．例えば，(2a)，(2b) は，ともに fest を伴った動詞であるが，(2a) は，状態描写で，(2b) は，結果構文である．

(2) a. Ein mutiger Mann hielt den Einbrecher *fest*.
a brave man hold-PST the burglar-ACC tight
‘A brave man held on to the burglar.’

b. Er band den Hund am Zaun *fest*.
he tie-PST the dog on-the fence-DAT tight
'He tied up the dog to the fence.'

(2a) では,「強盗を（きつく）捕まえておく（＝つかんで放さない）」という事態が表現されているのに対して，(2b) では,「犬を垣根に結びつけ」，その結果，犬が逃げられないくらいに「きつく垣根と接した状態」に変化したことが表されている．(2a) の基底動詞は，halten(=hold) であり，x を y の状態に保つという構造を持つために，第２類に似た状態描写の意味を獲得するが，(2b) の binden(=tie) は，結果を伴うかなり短時間の行為を表す述語である所から，後続の２次述語としての形容詞は結果状態として解釈される.[6] fest を副詞的に解釈して,「きつく結ぶ」という読みになる場合には，(2b'), (2b") のような語順になり，文末に fest が置かれる形にはならない.[7]

(2) b.' Er band den Hund *fest* am Zaun.

b." *Fest* band er den Hund am Zaun.

1.3. Adv＋V

「分離可能な前綴り」の内でその多くを占めているもののひとつは，話者からの相対的な方向性を示す hin-, her- といった副詞である．また，前置詞を取り込んだ (1d) の中の heraus-のような代名詞的副詞 (Pronominaladverbien) も高い頻度で用いられる．これらの派生動詞の特徴は，上記の (2b") と同様に「分離可能な前綴り」を文頭に移動できる場合があることで，その場合，基底動詞と単一の統語的まとまりをなさない可能性が高い.

(3) a. Thomas ist zur Hütte *hinauf* gegangen.
Thomas be-AUX to-the cottage up-PKL=go-PP
'Thomas has gone up to the cottage.'

b. *Hinauf* ist Thomas zur Hütte gegangen.

c. *Hinauf* zur Hütte ist Thomas gegangen.

d. Zur Hütte *hinauf* ist er gegangen.

---

[6] binden は，結果として「結ばれた状態」を弱く含意すると考えられ，鷲尾 (1997) の弱い結果構文に対応すると考えられる．ただし，形容詞 los(離れた) と共に用いて losbinden とすると「ほどく」の意味になる．この場合，binden が「結んだりほどいたりする行為」（つまり，変化の方向性の定まらない行為）を表すように再解釈されていると考えねばならない.

[7] もっとも，(2b') の場合，am Zaun が枠外配置 (Ausklammerung) の結果の語順という可能性も否定できない.

(3a) に対して，hinauf を前置したものが (3b) であるが，動詞句に対しての副詞と考えれば，(3b) の語順は説明がつく．しかし，hinauf は，(3c),(3d) のように前置詞句をスコープにすることができ，前置も後置も可能であるという柔軟さを持つ．

しかし，hin- や her- の付いたすべての前置詞的副詞から派生した「分離可能な前綴り」が同じような振る舞いをするわけではない．(4)〜(6) では heraus の例を挙げるが，ここでは，(4b) では文頭の位置への移動が可能であっても，(5b),(6b) では不可能であることが分かる．[8)]

(4) a. Der Geheimgang führte aus der Schule *heraus*.
the secret-passage lead-PSP from the school out-of-PKL
'The secret passageway lead out of the school.'

b. *Heraus* führte der Geheimgang aus der Schule.

c. Aus der Schule *heraus* führte der Geheimgang.

(5) a. Der Kuchen geht nicht aus der Backform *heraus*.
the cake go not from the baking-pan out-of-PKL
'The cake doesn't go out of the baking pan.'

b. **Heraus* geht der Kuchen nicht aus der Backform.

(6) a. Er hat schon die Ergebnisse *heraus*gefunden.
he have-AUX already the results-ACC out=of-PKL-find-PP
'He has already found out the results.'

b. **Heraus* hat er schon die Ergebnisse gefunden.

(4)〜(6) のデータの範囲で推論できることは，heraus が gehen(=go), steigen (=climb), führen(=lead) のような移動動詞と用いられた時は，文頭の位置への移動[9)] が容易なのに対して，(5) の herausgehen のように,「ケーキの取出し可能性」について言及しているような場合には，移動の意味合いがいくぶん薄れていることが予想でき，(6) に至っては，herausfinden がもはや「あるものが外に出る」という本来の移動の意味が極端に薄れているという事実から説明できるかもしれない．もしそうだとしたら，統語的には，これが heraus の副詞的自立性を決

[8)] ここでのデータに関しては，Walter Ruprechter 氏（都立大）にお世話になった．実際にここでの議論を確実なものにするためには，さらに多くのデータとインフォーマントによる判定が必要なことは言うまでもない．

[9)] この文頭の位置への移動が，話題化 (Topikalisierung) なのか焦点化 (Fokussierung) なのかに関してここで議論する余裕はない．

定しており，意味的には，heraus+V の述語的独立性と関係していることになる．(5),(6) のケースにおいて heraus は，ともに結果の事態を明示化するのに寄与しているところから，ある種のアスペクト・マーカーと考えることができる．[10] この点は，後でもう一度考察の対象とする．

1.4. P＋V

前置詞由来の PKL は，ab-, an-, auf-, aus-, bei-, durch-, ein-, nach-, über-, um-, unter-, vor-, zu-の 13 個である．この中には，ein-のように前置詞 in から来ているにもかかわらず，in と同形ではないものも含まれている．[11] これらの PKL の内，an-, auf-, aus-, durch-, ein- に関しては，Olsen (1996) の言う冗語的方向規定詞 (Pleonastische Direktionale) の用法が明らかに認められる．[12] Olsen (1996: 303) からの以下の (7) では，それぞれ角括弧に入っている前置詞句が冗語的な方向規定詞であり，PKL と同形の前置詞句が用いられて特定の方向が表される．

(7) a. Das Molekül lagert sich [*an* ein Ion] *an*.
the molecule store itself-ACC on an ion-ACC on-PKL.
‘The molecule is taken up by an ion.’

b. Sie legt eine Folie [*auf* den Projektor] *auf*.
she put a film-ACC on the projector-ACC on-PKL.
‘She puts a film on the projector.’

c. Er schüttet das Wasser [*aus* dem Eimer] *aus*.
he pour the water-ACC from the bucket-DAT from-PKL.
‘He pours water from the bucket.’

d. Die Kometenteile drangen [*in* die Jupiteratmosphäre]
the commet-pieces penetrate-PSP into the jupiter-atmosphere-ACC
ein-PKL.
into
‘The pieces of the commet got into the atmosphere of the jupiter.’

(7) の前置詞句を見ても，同じ形の PKL が使われることに冗語性を見てとる

---

[10] finden 事態が結果動詞なのに，なぜ heraus がアスペクト・マーカーなのか，という問題がある．この疑問に対してのひとつの解決策は，ある種の動詞（句）において,「結果状態が成立したことに関しては，さらに誇張してもよい」という語用論的な原則が関与していると考えることである．

[11] 歴史的な観点から見れば，接頭辞 be-も bei-からの派生である．また，この他に entgegen- のように接頭辞 ent-の後に gegen の付いたものもあるが，ここでは共時的観点に立ち，単一の前置詞と同形のもののみを扱う．

[12] この他にも，vor-, über- でも同様の冗語的方向規定詞が観察されるが，これらは，ここで挙げた 5 つの PKL と比べて結びつきが強くない．

ことができるが，(7) に対して，(8) のように PKL 無しでも文はほぼ同じ意味で成立することを考えると，(7) での PKL が冗語的に見える．

(8) a. Das Molekül lagert sich [*an* ein Ion].

b. Sie legt eine Folie [*auf* den Projektor].

c. Er schüttet das Wasser [*aus* dem Eimer].

d. Die Kometenteile drangen [*in* die Jupiteratmosphäre].

他方 (9) のように前置詞句無しの PKL だけの文も成立する，(9) の場合には，方向規定詞の具体的内容は発話文脈に内在していればよい．さらに，使用条件という観点から (6) と (8) を比べると，PV としては (6) のよりもむしろ (8) の頻度が高いことが知られている．すなわち，PV の使用に関しては，(6) の前置詞句の方が冗語的である．[13)]

(9) a. Das Molekül lagert sich *an*.

b. Sie legt eine Folie *auf*.

c. Er schüttet das Wasser *aus*.

d. Die Kometenteile drangen *ein*.

また，daran, darauf, daraus, darin といった代名詞的副詞が PKL の代わりに使われれば，前方照応的に先行文脈の特定の要素を受けるのに対して，PV ではむしろ発話文脈に内在する起点 (source)，目標 (goal)，行程 (path) を前提としている．

このように前置詞と同形の PKL が，同じ前置詞を伴った方向規定の句を取り得るという現象と並んで，特定の方向規定詞を同形の前置詞ではなく，別の前置詞の助けを借りる形で具現化する場合もある．(10) における PKL である ab- が von という前置詞を，zu- が auf を導くが，この場合，von が起点 (source) を，auf が目標 (goal) を示していると考えられる．

(10) a. Der Bergsteiger ist <u>vom</u> Gipfel *ab*gestiegen.
the mountaineer be-AUX from-the summit off-PKL-climb-PP
‘The mountaineer has climbed down from the summit.’

[13)] Olsen (1996: 306ff) では，このような冗語的前置詞句が SOV 型のゲルマン語系言語に「前置詞＋目的語」(PO) が加わった場合の典型的な現象として位置づけている．SVO 言語で，PO の語順を持つ場合には有意味な構文とならないという主張である．

b. Er ging <u>auf</u> die Frau *zu*.
he go-PST on the woman to-PKL
'He approached the woman.'

P＋V からなる PV の２つ目の特徴として，PKL が独立した状態述語として働くケースがある．多くの場合この種の PKL は，動詞 sein と共に述語を作り出す能力があり，その表す意味は，およそ (11) のようになると考えられる．

(11) (CAUSE x, (BECOME (PKL y))

以下の (12) の例は，このような用法の PV である．基底動詞の行為が行われ，その結果，目的語の NP が PKL の表す状態に変化することをそれぞれ表している．

(12) a. Er sägte den Ast *ab*.
he saw-PST the branch off-PKL
'He sawed the branch off.'

b. Das Auto wirbelte viel Staub *auf*.
the car swirl-PST much dust up-PKL
'The car swirled up much dust. '

c. Sie presste eine Orange *aus*.
she press-PST an orange out-PKL
'She squeezed an orange.'

d. Er legte beim Malen Zeitungspapier *unter*.
he put-PST while-the painting newspaper under-PKL
'He put down newspaper while painting.'

e. Sie deckte den Topf *zu*.
she cover-PST the pot closed-PKL
'She covered up the pot.'

(12a) では,「ノコギリで枝を切った結果，枝が取れた状態」が，(12b) では,「たくさんのほこりがくるくると回って，上がる状態」（＝舞い上がった状態）, (12c) では,「オレンジを押しつぶし，その結果オレンジの中身が外に出る状態」, (12d) では,「新聞紙を置いて，新聞紙が何かの下に位置するような状態」，(12e) では,「鍋を覆って，鍋の口が閉じた状態」が表されている．ここでの意味構造は，1.2. の第３類で見た A＋V の結果構文と基本的に同じであると考えられる．P＋V の場合，結果状態が位置変化と明確に結び付いている点が特徴的である．

P＋V の構造での３番目の特性は，アスペクト・マーカーとしてのものである．前置詞としての場所の意味合いを失い，出来事の特定の局面を際立たせる働きである．行為の側面から切って分類すると，表１のようなおおまかな対応関係が見られる．

起動相	an-（接近する動き）；auf-（上への動き）；ein-（中への動き）
完了相	ab-（離れる動き）；auf-（上への動き）；aus-（中から外への動き）durch- （通過する動き）；
反復相	auf-（上への動き）； um- （迂回，回転の動き）
継続相	durch- （通過する動き）；vor-（前への動き）

表１：相と PV の関係

特定の方向への移動が，行為の局面と対応することは，ドイツ語に限らず英語や日本語でも広く観察される現象であるが，どのような方向がどの相と対応するかは，決して一義的ではなく言語間での差異が認められる部分であろう．また，特定の方向への移動が，必ずしもひとつの相と結び付くわけではないことは，auf- を見れば一目瞭然である.「上への動き」といっても，英語の up に対応するような動きも，on/onto に対応するような動きも表すことができ，実際にはこれほど単純に割り切れるわけではない．しかし，行為の局面に対する分析的意味の付加に深く関与しているのも事実であり,[14] P＋V 構造の大きな特徴である点には疑いもない.

2. 連続性からの視点

前節までの議論から，いわゆる分離可能な前綴りの内，V と N を除外することは正当なことと考えられる．それに対して，A, Adv, P に関しては，かなりの相互関係が見られることも明らかになった.

まず PKL が P の場合，P は方向規定詞であり，その方向規定の NP が文内部から消えたものと考えられる．その意味では，明らかに P としての性格を残しているが，統語的にはもはや支配する NP を持たなくなっている．一方，1.4. で触れた代名詞的副詞は，PP から Adv に資格を変えてはいるが，前方照応的に代名詞としての性格を持ち，PKL よりは明示的な意味・統語関係を維持している．この連続性は，以下のような文の関連で見てとることができる.

[14] この背景には，もちろん語彙化による複雑な歴史的変遷があり，構成的に分析できないような動詞も多く存在する.

(13) a. Sie legt eine Folie [*auf* den Projektor] *auf*.
she put a film-ACC on the projector-ACC on-PKL
'She puts a film on the projector.'

b. Sie legt eine Folie [*auf* den Projektor].

c. Sie legt eine Folie [*darauf*].

d. Sie legt eine Folie *auf*.

ここで注意すべき点は，PV の auflegen が，(13a) から (13d) の順に派生されたものではないということだ．(13b) と (13c) は明らかな派生関係があり，(13c) の darauf は (13b) の PP と同様に文頭へ移動できるが，(13a),(13d) の auf は単独で文頭へは移動できない．[15] 従って，(13a),(13d) の PKL の auf は，おそらく (14) のような統語構造における V' の中にとどまっていると考えられる．

(14) $[_{V'}\ [_{PP}\ ([_{PP}\ \text{auf NP}])\ \ \text{auf}]\ \ \text{V}]$

このような構造を正当化するようなデータとして，ドイツ語では，前置詞句内の構造として，$[_{PP}\ ([_{PP}\ P_1\ NP])\ \ P_2]$ ような形が (15) のようにかなりの範囲で可能であることが挙げられる．

(15) a. *von* heute *ab*
from today off
'from today'

b. *auf* das Bundeshaus *zu*
onto the federal-parliament to
'to the federal parliament building'

c. *durch* den Wald *durch*
through the forest through
'through the forest'

d. *zur* Hütte *hinauf*
to-the cottage up[sp→]
'up to the cottage'

(15) の PP の後に置かれた ab, zu, durch, hinauf は，従来ただ副詞としての取り扱いを受けてきたが，これを Bierwisch (1988) や Wunderlich & Herweg (1991) のような PP の投射の一部に取り込むことで PKL を捉えることができる．

[15] 例外的に，aufmachen, anmachen に限っては，auf や an が文頭へ移動できる．(i) Auf hat sie die Tür gemacht. (ii) An hat sie das Licht gemacht. cf. Stiebels (1996:160)

一方，P＋V の構造が，一部で A＋V の第３類と重なることを前節で見た．この場合，P と同形の PKL は，すでに結果状態を表す A と同等になっていると考えることができる．(1c) の例文に戻って考えてみると，その根底には,「Erich がドアを押した」という出来事があり，その結果「ドアが開いた」という結果が生じていることになる．

(1) c. Erich drückte die Tür auf.
Erich push-PST the door-ACC open-PKL
'Erich pushed the door open.'

実際に，Die Tür ist auf.(The door is open.) の文が成立することからもこの PKL がすでに前置詞ではなく，形容詞的に状態を表すことは明らかである．統語構造に関しては，結果構文の扱い方に依存するのでここでは深入りしない．

最後に，アスペクト・マーカーとしての PKL の扱いが残されるが，これはより密接に動詞範疇の中に入っていると考えられ，例えば，Okamoto (1999) での機能範疇 E のような存在[16] を V^0内部での構造に仮定することによって説明できる．

3. まとめ

本稿では，PV の特性を，PKL の元となる統語範疇に従って N, V, A, Adv, P の順に検討した．その結果，N, V に関しては，特定の語彙化した構文でしかなく，いわゆる「分離可能な前綴り」としての特性から外れることを確認し，その上で，A, Adv, P に関して以下の４つの結論を得た．

(I) PKL の一部は，方向規定詞として使われる前置詞から派生したもので，前置詞的性格を持って V' の中に存在する．

(II) PKL の一部は，方向規定の副詞から派生したもので，VP あるいは，文全体にスコープを持つ副詞と等しくはなく，むしろ前置詞句をスコープとする．この副詞は，(15) に示したように，前置詞から派生した PKL とその機能上等しい．

(III) PKL の一部は，結果状態を表す形容詞であり，前置詞から派生された PKL も，位置変化後の状態を表すため，その機能上きわめて形容詞に近い存在である．

---

[16] Snyder (1995), Yoshida (1998) らの提案にそったもので，Event の特性を表すような語に対して与えられる統語範疇．事象構造との対応に沿って設けられたもの．

(IV) PKL の一部は，事象の在り方を動詞の相という観点から特定化する．この場合の PKL は，基底動詞と極めて密接な関係にあり，構成的に結合した動詞の一部として扱うことができる．

PV は，PKL としての前置詞から見ると３つの軸があり，その軸上での連続体として捉えられる．すなわち,（１）方向規定詞としての前置詞から派生し，その本来の指定名詞を失ってしまい,「弱い」前置詞句として V' の中に残されたもの,（２）方向規定詞が位置変化後の状態を表し，結果構文の結果状態と等しくなり，形容詞的に変化したもの，そして（３）もっぱら動詞の相を特定化するように動詞に組み込まれたものである．統語範疇的には，まさに前置詞，副詞，形容詞の性格を場合によって獲得しているかのように見えるが，その程度は個別の動詞とその複数の読みによって異なっている．このような，非離散的性格が，これまでの統一的な PV の扱いを拒んできた原因であると思われる．従って，今後 PKL の分析的研究を押し進めるためには，より見通しのよいクロス・カテゴリアルな現象を扱える枠組みの開発が急務となるだろう．

参考文献

Adelung, J. Ch. (1782,1971) Umständliches Lehrgebäude der deutschen Sprache zur Erläuterung der deutschen Sprachlehre für Schulen. 2 Bde. Leipzig. Nachdruck Hildesheim/New York.

Bierwisch, Manfred. (1988) On the Grammar of Local Prepositions. In: Bierwisch, M., Motsch, W. & Zimmermann, I. (eds.) Syntax, Semantik und Lexikon. studia grammatica 29, 1-65.

Bierwisch, Manfred & Lang, Ewald. (1987) Grammatische und konzeptuelle Aspekte von Dimensionaladjektiven. studia grammatica 26, 27. Berlin: Akademie Verlag.

Drach, Erich. (1937,[4]1963) Grundgedanken der deutschen Satzlehre. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Okamoto, Junji. (1999) AN-Verb Constructions in German in View of Compositionality. 『東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究』研究成果報告書 II (Part I). 47-65.

Olsen, Susan. (1996) Pleonatische Direktionale. In: Harras, G. & M. Bierwisch (eds.) Wenn die Semantik arbeitet. Tübingen: Niemeyer, 303-329.

Stiebels, Barbara. (1996) Lexikalische Argumente und Adjunkte: Zum semantischen Beitrag von verbalen Präfixen und Partikeln. studia grammatica 39. Berlin: Akademie Verlag.

Washio, R. (1997) Resultatives, compositionality and language variation. Journal of East Asian Linguistics 6, 1-49.

Wunderlich, Dieter & Herweg, Michael. (1991) Lokale und Direktionale. In: Armin von Stechow/D. Wunderlich. (eds.) Handbuch der Semantik: Ein internationales Handbuch der zeitgeössischen Forschung. Band 2. Berlin, New York: de Gruyter, 758-785.

吉田 光演. (1998) Verb + Partikel と分離動詞の英独比較．日本独文学会シンポジウム「言語類型論とゲルマン語学」におけるハンドアウト.